

Title	アイルランドの英語について
Author(s)	松木, 泉
Citation	英文学評論 (1955), 2: 158-168
Issue Date	1955-03
URL	<a href="https://doi.org/10.14989/RevEL_2_158">https://doi.org/10.14989/RevEL_2_158</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

# アイルランドの英語について

松 木 泉

## 序

アイルランドにおいて用いられ、且つ用いられてきた英語は Irishism とか Anglo-Irish とか称せられて、殊にアメリカ英語との比較・対照には引合いに出されるのが常であるが、そこで一口に言われる Anglo-Irish なるものは「標準英語」などと言う時ほどの内容の明確さと統一性をもつたものであるうか、アメリカ大陸における英語が一口に「アメリカ英語」とは決して言い切れぬ程に、地域的、階級的その他の variation を包含している如くに、国土の面積、ほぼ我が九州の二倍弱の小島とは言え、アイルランドにおける英語もまた決してそれほど単純・等質なものではないように思われる、殊に主として地理的な面から見る時、地域に応じてその間に、或いはいくらかの、時には可成りの差を示すのではないかという事は、アイルランド島の歴史を振り返つてみれば当然予想されるのである。しかしこの点は従来余り明かにはされていまいようである。アイルランドの英語と言えば偏めに Synge であり、Synge と聞けばアイルランド英語を想うという程度ではなかつたかと思われる。まして、アイルランドにおける各時代の英語がどのようなものであつたかに至つては、頼るべき文献をもたないのが現状である。

(曾て中島文雄氏が方言の分類をされ(英語教育双書「標準語、方言及び俗語」(一九三五年)、それぞれの方言を用いた文学作家を挙げられた時) Yorkshire では Emily Bronte (*Wuthering Heights*) と J. B. Priestly (*The Good Companion*) を主なもの

なれているのであるが、若くして惜しまれつつ逝った佐藤偉氏の遺稿 *A Grammar of Dialect of West Riding, Historical and Descriptive* はこの二つの作品を中心として行われたもので、正に中島氏の指摘されたものと符号するのであるが、最後のアイルランドの方言になると「Anglo-Irish」に *Synge* などがある。しかし記されていないのは方言中におけるその位置を想わせて興味がある。しかし *NED* でも一人前の方言としての取扱いはしていない（“Anglo-Irish is not considered as a mere dialect of English, but receives special treatment.”）。このことは、仮にもし実在していたとすれば、曾ての朝鮮・台湾における日本語といった類の混血語であり、無教養な人達の間に見られた過渡的な、時間的な長短の別はあつたとしても、要する過渡的な現象であつた事を考えれば当然の処置かもしれない。尙また、*M. Bourgeois* は *J. M. Synge and the Irish Theatre* (1913) にあつて “a philological study of the Irish dialect of English …… has been done, and well done.” と言切つてはいるが、その脚註（二二—三四頁）にあげられている二十に余る文献は、その二三を除いて、大部分は新聞・雑誌などに掲載されたもののように、我々としては恐らく利用不可能なのではないかと思われる。）

一

十二世紀の後半、ヘンリー二世の時代、詳しくは一一六九年の五月、Leinsterの王 Dermot MacMurroughの救援の需めに応じて Robert Fitz-Stephen がノルマン人とウェールズ人の騎士、兵士、射手からなる手兵三百を率いて、アイルランド島の南東、Fethardの海岸 Baginbun Head に上陸したが、所謂 Anglo-Norman Invasionの始まりであり、同時にこれが英語とアイルランド語とが大きく交渉を始める発端でもあつた。同盟軍はその年 Wexfordを降した。二年後、Dermotの再度の願ひに応じ、有利な交換条件のもとに Earl of Pembrokeの Strongbowが大軍を繰出して来島、同盟軍は Waterford, Dublin, Dragheda, Corkを次々に占領していった。Strongbowのアイルランド島における勢力の強化を恐れたヘンリー二世は直に Dublinに赴いて論功行賞を行った。Leinsterは Strongbowに、Meathは Hugh de Lacyに、Ulsterは John de Courcyに、Dublinは Bristolの市民達に与

えられた。当面の敵 *Rory O'Connor* とは条約が取り交され、*Connaught* の統治権が認められた。しかし名ばかりの封土を眞の領土として確保し得るか否かは、かかつてその後の戦争によるのであり、土着の王侯の反撃に遭つて、必ずしもことははかばかしくはなかつたようである。*Uister* の如きは極く一部を除いて、数世紀後まで遂にノルマン人も英国人もここに足場を築き得なかつたのである。

占領者達は何れも当時英本土において優位を誇つていたノルマンの家系に属する人々であり、英語を話す者はそれ程多くはなかつたであろうが、十三世紀に入り彼等が *Leinster* や *Meath* 更に *Munster* や *Uister* の一部において莊園制度を充分に發展させた頃には、莊園内の居住者や傭兵の類は殆ど凡て英国人であり、小作人、借地人、これ又大部分が英国人であつた。これら新来者と土着のアイerland人との人口上の比率には無論絶えざる変動があつたことであろうが、とに角こうして下層の英国人がアイrelandへ流れ込み、行き着いた所では英語が次第に地歩を占めて行つたであろうことは明かであり、彼等の話した南方英語に属する方言は、英国人と英語とが最も深く根づいた *Wicklow Hills* を挟む *Dublin* から *Wexford* へかけての地域では可成り一様な形で、その他の部分では略々相似的な形で行われていたらしく、後世のアイreland英語の原型をとどめているのが *Kildare Poems* 中の十六篇の英詩である。

十三世紀の間に一応地歩を得た英語も、十四・十五世紀には次第に衰亡の一路を辿つた。ノルマンの征服者達は互に孤立していたし、戦争の止むときはなかつた。いつしか彼等は英国王の支配を脱し、或いは遂に土着の王族に屈服し、或いは彼等と婚を通じ、或いは土地土地の習慣・言語に泥んで、やがてはその土地の領首と化し去つた。一時は山間僻地に追いやられたアイreland人は再び平野に立戻り、都市の城壁に迫るのであつた。*Anglo-Norman Invasion* も遂に彼等自身の言語と習慣による統一された集団をアイreland島に築き得ずして、完全に土着の住民に同化されてしまつたのである。こうした中にあつて唯一つの例外は *Dublin* を中心とする *Pale* と名づけられた地域

であつた。その範圍はアイルランド軍の侵入と撃退の度合に従つて変化はあつたが、ヘンリー八世の頃までは大体 Dublin を中心とし、Louth と Meath の大半、Kildare それに Wicklow の山々の麓の地が Pale に含まれていて、ここだけは厳然と英国の法律が支配していた。小地主達はどしどし土地を見棄てて英本国へ立歸えるか、あるいはこの Pale へ集まつてきた。Pale の外側では相変らず戦乱の絶え間はなかつた。今やアイルランド人及び彼等に同化したノルマン人達は英国人にとつては敵であり、英国の法律は英国人の保護のためにのみ適用されるようになった。アイルランド島における英国の、従つて英語の類勢を挽回する為の一策として発布された一三二六年の Statutes of Kilkenny によつて、凡ての英国人は英語を学習し、且つ使用することが奨励され、教会に benefice を得る者には英語の使用は絶対的であつた。狭隘な国家的見地に立つこの法令によれば、スポーツさえも例外ではなく、外来の遊戯を禁止する条項まで設けてあつた。かくして英本国の勢力の及ぶ所は遂に Dublin を中心として Pale の地方に局限されてしまふことになつたが、アイルランド島の一角を根拠とするこの新しい英国領にはやがて新しい英語が生れて行くのであつた。一四二九年に Dublin の議會がヘンリー八世に送つた Memorial の英語は多少の provincialism を混えた当時の Standard English であり、Irishism と呼び得るものは全然含まれていなかつたらしい。また十六世紀の初期におけるアングロ・アイリッシュの諸侯がヘンリー七世やヘンリー八世に送つた書簡は Dublin との接触から遠ざかるに従つて多少の Irishism を示してくるに過ぎず、殆ど純粹の標準英語であつた。しかしこれらの英語は所詮公用の英語であり、日常英語ではなかつた。母国の文明からは完全に縁の切れた田舎住いの英国人は別として、十五世紀における英国系アイルランド人の言語は、古いアイルランド英語に新に Midland の方言が継ぎ足されて、しかも全体としてアイルランド語によつて様々の程度の変容を受けたものであつた。その頃のアイルランド英語は *English Conquest of Ireland* と *Secreta Secretorum* とによつて代表される。

中世のアイルランドにおける都市は数が多く、且つ強大でもあつたものの、島内の奥地では早くも衰えを見せ始め

ていた。これらの都市で用いられていた英語は南方英語の基層の上に古い *Kildare* の方言の特徴を多分に含み、それに *Midland* 方言を甚しく混えたものであつたと言われる。都市の住民は彼等の特権を擁護する一つの手段として英語を固守し、都市はその為の法令を發した。Dublin では特にしばしばこの種の排他的な法律が作られた。それにも拘らず現実には孤立的ではあり得なかつた。都市の周辺の土着のアイランド人との交渉の絆は切れる筈もなかつた。アイランド人も英国の法律に忠誠を誓うことによつて市民となり得た。かくして中世の終り頃には都市の住人は日常の用を弁ずるには英語よりも却つてアイランド語の方をより多く用い、あらゆる面において次第にアイランド的に移り行く傾向にあつた。かかる環境であつてみれば都市の英語が甚しくアイランド語の影響を受けたであらうことは想像に難くない。アングロ・アイランドの首都であり、Pale の中心をなす Dublin の英語もかかる影響から脱がれることは出来なかつた。英本国との交渉を持ち続けて来たため、可成り形態上の混合はあるとしても、古いアイランド英語の特徴の多くを具えていたことは Dublin における英語の古さを示すものと言えよう。しかし Dublin の英語に見られるこの傾向は十六世紀に向うと共に改まつて、いよいよ標準英語に近づき、特にアイランド英語的な、従つて南方英語的な形態は著しい減少を示した。

目を西部の *Connaught* に転ずれば、ここはもと *Henri* 二世が *O'Connor* を封じた地であるが、*Connaught* 最大の都市 *Galway* は一二三三年 *Richard de Burgh* によつて奪い取られ、後世の史家の所謂 “*Tribes of Galway*” が植民した。公用語としての英語にはアイランド語の影響は殆どなくても、日常語においてはこの都市も恐らく他の諸都市と同様の運命を辿つたことであろう。中世の末期における話しことばとしての英語は *Pale* と諸都市とに限られ、しかも急速にアイランド語に置き換えられて行つたのである。要するに中世のアイランドはまだアイランド語の国であり、たやすくは外国語に屈服しなかつた許りか、逆に外国語を話す侵入者を自国に吸収するほど強力な同化力をもつていたのである。

十六世紀の後半から十七世紀にかけての英国ではアイルランドの全住民を英国からの移民によつて置換えるべし、という政策が考えられていた。これが机上の空論に終つたことは言うまでもない。メアリー一世の治世に、女王に因んで名づけられた Queen's County と Philip に因んだ King's County とに植民地が設定されたが、勤勉な移民を得ることが出来ず、やがて消滅の憂目にあわねばならなかつた。その為か、Queen's County と King's County という名も遂に後世に残らなかつた。現在の Leix と Offaly がこれに当る。また、北方の Uister の六州へはジェイムズ一世時代の一六〇七年以後植民が始められ、London 市からの移民は Derry に送り込まれた。Londonderry の名はここに始まるのである。三年後の一六一〇年、スコットランドも Uister の諸州への植民を強力に遂行し始めた。英国移民が一六二八年の頃には僅か七千にすぎなかつたのに反して、スコットランド人は年々その数を増し（その間、一六四一年に Uister では土着の旧教徒の叛乱が起り、新教徒四万人が殺され、Cromwell が鎮圧に乗り出したこともあつたが）Lowland の方言が多量に流入し、そのあるものは他の地方にも及んだ。今も Uister の方言がスコットランドの方言に極めて近似しているのはこのためである。Uister の方言はアイルランドの方言の中でも特異な性格をもつたものと言えよう。

これと同時に Uister 以外の地への植民も国策の線に沿つて増加の一途を辿るばかりで、Commonwealth 時代にその絶頂に達した。これによつてアイルランドの土着民は殆ど農奴の境遇に成り下り、旧来の社会組織は潰滅的打撃を受けた。英本土からの新しい移住者達は英国民の殆どあらゆる階層に涉り、出身地域もまちまちであつたが、大部分は西部地方であつた。しかしそういう地方差は新植民地においては次第になくなつて行つたに違いない。同時に彼等の話しことばも概して西部地方の方言色を伴つた、標準英語に近いものであつたことも充分想像出来る。現代のアイルランド英語はその大半をこれら新しい移住民達の英語に基礎を置いている。つまり現代のアイルランド英語は、より古い時代のアイルランド英語とこれら新しい移住者達の英語とアイルランド語との三者のまざり合つたものと言

えばよからう。しかしこの種の英語が十七世紀には早くも出来上つていたと言うのではなく、十八世紀の後半まで待たねばならなかつた。既に Leinster, Munster, Ulster の中でも恰好の地は殆ど凡て大規模な英国人の押収に失われていた上に、新来者達もアングロ・ノルマン時代とは違つて、増大しつゝあつた強力な國家的勢力を後楯にして、居住する土地の言語を採用する所か、却つて機会ある毎に土着民に彼らの言語を強制した。アイルランドにおける新旧住民の数の上の比率の点で、アイルランド人はすでに Cromwell の軍勢や、相つぐペストや飢饉によつて甚大な減少を來し、十七世紀の後半には原住民の約五分の二は死に絶えていたのであるが、それでも尚十八世紀のアイルランドはまだアイルランド語を話す人の数の方が多かつたと言われる。これはアイルランド語の英語の侵入に対する相當な抵抗を示すものである。しかし十八世紀の末から十九世紀の中期にかけてアイルランド語は急カーブを描いて衰えて行く。原因はいろいろある。Kildare の Maynooth にある旧教の神学校が英語で課業を行うようになったこと。英国との合併に反対し、旧教徒の解放を叫んだ Daniel O'Connell が政治的な集會では英語を用いたこと。何れも旧教関係者の英語奨励である。また Dublin の議会の努力も与つて力があつた。やがてアイルランド語は一つの patois にすぎぬものとなり、Munster, Connaught, Ulster の一部でしか聞かれなくなり、しかも序々に英語の進出の前に敗れ去らうとしていた。しかし O'Connell にしても村落の僧侶達にしても、日常語は農耕漁人の習ひ覺えたアイルランド英語であり、或いは少くとも彼等の英語は地方色ゆたかなものであつたであらうと言われている。

この項は主として次の書に負つてゐる。

S. Gwynn: *The History of Ireland*, New York, 1923.

L. R. Murheard (ed.): *Ireland*, London, 1952.

A. G. van Hamel: *On Anglo-Irish Syntax* (Englische Studien 45), 1912.

J. M. Clark: *The Vocabulary of Anglo-Irish*, St. Gallen, 1917.

J. J. Hogan: *The English Language in Ireland*, Dublin, 1917.

アイルランドにおける英語の歴史的概観から、アイルランド英語の性質を特徴づける二つの重要因子がとり出せようである。その一つは、十七世紀の大規模な植民によつてアイルランドに英語が非常な勢いで導入されてから以後は大した移民は行われなかつたが故に、アイルランドの英語は英本国の英語がその後を受けた変化影響を蒙らず、従つて十七世紀の英語そのままの多くの特質を保有してゐるであらうこと。その二は、英語がアイルランドで一般の間に普及したのは比較的新しい時期に属することであり、農耕漁人の言語習得が完全であり得る筈はなく、発音においても語句・構文においてもその習得に多大の困難を感じたであらうことは疑いない。それにアイルランド語は極めて *idiomatic* な言語である。従つて彼等がまずアイルランド語の語句・構文を英語のそれに取換えただけの、いわば直訳体の英語を以て話し始めたであらうことである。古い時代の英語に根ざし、アイルランド語の影響を受けたアイルランド英語のもつこの二つの特質が、歴史事情を異にするところから生ずる地域差と微妙にからみ合い、二者の混ざる程度の濃淡に従つて、ここに様々の様相を呈したアイルランド英語が存在する筈である。ほぼ予想し得る如くに、当初から英語との絶えざる交渉のあつた南部や東部、特に *Leinster* においては十七世紀の面影を遺すこと大きくてアイルランド語の痕跡は少なく、逆に西部地方では果に近くなる程アイルランド語的な語句・構文は他のどの地方よりも濃厚な筈である。しかし要するに程度問題である、歴史的推測から直ちに、東部にはアイルランド語の片りんも聞かれる筈がなく、西部には古い時代の英語のある筈がない、などと速断を下すならば、行き過ぎのそしりはまぬがれぬであらう。だがしかしそういう細部にわたることは現地においても本格的な調査は行われてはいないようであり、またそうした言語地理学的な企てはもとより空間的に隔つた我々のよくなし得る所ではない。我々に可能なことは唯、入手し得る個々の文献・作品などの資料の再検討を行うことである。およそ方言研究には二つの方法がある。

直接観察か、書かれた資料の研究によるかである。現地採集が不可能である以上、後者の方法をとることは止むを得ない。その場合資料の信頼度は一にかかつて記録者なり作家なりがどの程度忠実な観察者であつたかにある。同時に今の場合、彼等がどの程度標準英語の感化、影響を受けている人達であるか、彼等がアイルランド英語を作品なり記録にとどめた時の意図・目的はどこにあつたかによつても文献の価値は相違し、それに応じて見方を変えなければならぬであろう。文芸作家の場合には何か特殊な効果を狙つて、稀には虚構の語法が用いられることがあるかもしれない。こう考えてくると事はますます複雑さを加えてくるのであるが、この点は何かのより所によつて検討を加えて行くより外にやり様はなさそうである。

こうしてアイルランド英語も地域によつて様々の位相差を示しているのが実状であるとしても、現在の所、アイルランド英語に対してほどの程度の分類が施されているのであろうか。Wright の *English Dialect Grammar* では North Ireland と South Ireland の大区分の外に、北部の Ulster、それを細分した Donegal, Londonderry, Antim, Down それから Dublin, オーストランドとして Wexford が quote された。Seat の *English Dialects* (一〇七頁)では Ulster, Dublin, Wexford の三方言に、EDD の “List of Counties” では一つの county を南北に二分したりして合計四十に達するが、但しその中にはアイルランド島を東西南北に分けた四大区分を含んでゐる。しかし方言の区分というものは Wright (*op. cit.* Introduction) も嘆じているように、超現実的な資料と採集者のない限り、その境界線は所詮 “arbitrary” なものとなり終ることは致し方ない。それに方言間の差が教育の普及や交通の発達のために急速にちぢまつて行くのが実状であつてみれば尚更のことである。一応は county によつて分類し、それが大きくまとめられれば更に便宜であろう。それにしても個々の資料を検討するに際して、いわば共通アイルランド英語といつたものもあつて、それと比較・対照できれば甚だ好都合である。J. J. Hogan (*op. cit.* p. 62) は “What may be called Common Anglo-Irish” を想定し、“Common Anglo-Irish is a reality” と

結んでゐる。これを音韻の面において概説したのが上掲の書(特にその第三部)であり(A. C. Baugh 著 *History of the English Language* 1935)に於てこの書を“*The only scientific account of the English Language in Ireland*”と評してゐる)。語法の面から叙述したものが *An Outline of English Philology* (Chap. XV, Dublin, 1934) である。個々の作品・資料を一応これに照して行つて、それぞれの結果を綜合する時、終局的には、単なる地理的分布図に終らず、アイルランド英語のより闡明な姿が浮び上つてくるのではないかと思われる。

一の項の終りに掲げた文献の中、Hogan は音韻に詳しく、J. M. Clark は主として語彙を扱つてゐる。A. G. van Hamel は Yeats と Synge の語法に見られる“*the most striking Irishisms*”の説明を目的としてゐる。しかし Yeats や Synge だけがアイルランド英語の凡てを示すものでないことは最初に述べた通りである。

さきにアイルランド英語は英語とアイルランド語のまざり合つたものであると言つたが、アイルランド英語が英語であることに間違ひはない、つまりアイルランド語を基層(Substratum)とした英語である。(この故に英語では Anglo-Irish よりも Irish English と名づける方がより妥当である)。丁度、サンسكريット語やイラン語に他の印欧語には見られぬある種の特徴を与えたものが、もとは印度全域に拡がっていた先住民の言語にして現在は印度の南東部にのみ行われているドラヴィダ語がその原因であろうと信ぜられてゐるのに似てゐる。我が東北方言に対するアイヌ語の影響も、現在の所、それほど濃厚だとは考えられてはいないが、同方言の發達の研究には国語学者が常にこの基層に対しても考慮を払つて来たことは言うまでもない。現代に例をとれば中南米の各地に行われる American Spanish の問題で、標準的なスペイン語である Castilian の基層の上にアメリカ英語が地域的な差はあつても多大の影響を与へつつあるのである(C. E. Kany: *American Spanish Syntax*, 1951 は比較的新しい文献の一つ)。かかる基層説を考慮に入れる場合、基層となるドラヴィダ語、アイヌ語、アメリカ語の熟知されてゐることが、理想的には前提条件でなければならぬ。アイルランド英語とても例外ではない。殆ど英語からのみの従来の方法に加えて、アイルランド

語の方からも検討を加えて行かなければ完全でないことは論をまたない。しかしこの事は言うは易くして実行には多大の困難を伴うであろう。何故なら現在の所では殆ど唯一の典拠とされている P. W. Joyce: *English as we speak it in Ireland* (1910) よりも更に一層信頼するに足る文献を新に求めなければならないからである。

最後に諸言語の術語について一言すれば、アイルランド語はスコットランド語とマン島の言語 (Manx) と共に Gaelic 語と総称せられ、ウェールズ語とコンウォール語とブルターニュ語の三つを総称した Britanic 語と共に曾ては全欧州に勢力を振つたケルト語派の生き残りである (但しスコットランドとマン島のケルト語は殆ど死滅せんとし、コンウォールのケルト語は十八世紀を以てすでに死滅してしまつている)。しかしアイルランド語をゲールリック語ともケルト語とも称して、学者により用法はまちまちである。(McIntosh: *Introduction to Survey of Scottish Dialects* (1952) に於れば University of Edinburgh では一九四九年以来スコットランドの方言と今尙残存するゲールリック語の徹底的調査が開始されていることがその方法論と共になががえる。)(二一九・九)